

# 鮭鱒彙報

第八年 第十三號

昭和十一年九月三十日

## 北海道鮭鱒保護協會

(膽振國千歲村北海道鮭鱒化場內)

### 目次

#### 論叢

鮭鱒類研究の現状……………東京帝國大學理學博士 田中茂穂…(一)  
鈴木牧之著北越雪譜を薦む……………理學博士 藤田經信…(四)

#### 資料

越後の色鯉……………新潟縣水産試驗場技師 越田秀包…(七)  
各種鱒種魚の酸素消費量に就て……………農林省水産試驗場木崎分場 畑久三…(六)

#### 彙報

北海道養鱒組合の設立……………(二二)  
北海道湖沼養殖研究會の開催……………(二一)  
民營孵化事業成績……………(三)

#### 會報

本會役員會記事……………(二四)  
第八回本會總會記事……………(二五)  
會員消息……………(三)

#### 會告

會費領收報告……………(三五)  
寄贈圖書……………(三五)

# 北海道鮭鱒保護協會々則

第一條

第二條

第三條

第四條

第五條

第六條

第七條

第八條

第九條

第十條

第十一條

第十二條

第十三條

第十四條

本會ハ鮭鱒其ノ他ノ養殖事業並鮭鱒漁業ノ改善發達ト關係業者ノ連絡緊密ヲ圖リ以テ漁利ノ維持増進ヲ期スルヲ目的トス

本會ハ北海道鮭鱒保護協會ト稱シ北海道鮭鱒孵化場内ニ置ク

本會ハ北海道鮭鱒孵化場親魚捕獲受託者、鮭鱒漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業並漁業ニ關係ヲ有スル者ヲ以テ組織ス

本會々員ノ種類ヲ左ノ如ク分ツ

一 種會員 親魚捕獲受託者、鮭鱒ノ免許漁業者及鮭鱒其ノ他ノ養殖事業經營者

二 種會員 鮭鱒其ノ他ノ養殖及漁業ニ關係ヲ有スル者

本會ハ其ノ目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ行フ

一 鮭鱒其ノ他ノ養殖及漁業ニ關スル調査、試験研究、鑑定、紹介及質疑應答

二 種卵、種苗ノ配給斡旋

三 機關誌及有益ナル圖書ノ刊行

四 官廳ノ諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳ス

五 其ノ他必要ト認ムル事項

本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長

理事

役員

總務

若干名(内一名ヲ理事長トス)

役員ハ總會ニ於テ會員中ヨリ選舉ス

理事長ハ理事中ヨリ會長之ヲ指名ス

役員ノ任期ハ五年トス

總會ノ決議ニ依リ本會ニ顧問ヲ置クコトヲ得

會長ハ本會事務ヲ擔當スル者ヲ任命又ハ囑託スルコトヲ得

本會々員ハ左記ニ依リ會費ヲ負擔スルモノトス

一 種會員 親魚捕獲受託者ハ當該孵化場ノ設備ニ應ジ別表ニ依ル

鮭鱒漁業者ハ免許漁業權各一ヶ統ニ付キ年額金一圓トス

但シ一人最高負擔額ハ金五十圓ヲ超エザルコト

養殖事業經營者ハ年額金五圓

二 種會員 年額金一圓

本會々計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

毎年一回總會ヲ開キ會務ニ關スル決議ヲ爲ス外必要ト認ムル協議研究ヲ行フ

會長ニ於テ必要ト認ムル場合ハ隨時役員會ヲ開キ會務ヲ處理ス



〔撮男芳田半〕

—川と湖—

論叢

鮭鱒類研究の現状

理學博士 田 中 茂 穂

鮭鱒類は廣く考へると凡そ十五種位ある。内地以外を考へると更に數種を加へるべきこととなる。此の内て吾々が日常サケ類マス類と云つて居るのは僅に數種に過ぎない。

従來、久しい間鮭鱒類の分類は魚類中最も困難な部類の一つと考へられてゐる。その主な理由は「各種毎に個體變化が多いこと」「体面の色彩が種々の配合になつてゐない爲、各種間の識別が困難なこと」「異種間の雜種と覺しいものに度々遭遇すること」の三つの場合にある様である。従つて是等の性質と趣を異にした性質を持つてゐる魚は割合に分類が容易であると考へられたものである。例へばペラ類やテンジクダイ類などは分類の容易なものと思はれた

が、是とても中々分類が六つかしく、その困難は鮭鱒類に劣らないと私は思つてゐる。これを實證するものとしては DAY の *Fishes of India* や BREWER の *Atlas Ichthyologique* とを較べて見ると中々面白く且つ分類學原理（又は分類學研究法）に一大暗示を與へてゐるものであるが、何故か多くの學者が是に氣付かないやうである。是等兩者の書物を見ると、DAY は印度、緬甸、錫崙に住む魚を述べ、BREWER は東印度諸島に産する魚を述べてゐるから、兩者の間に共通の魚が多い。是等の書物の内で、ペラ類は BREWER の方が早く公表せられ、テンジクダイ科は殆ど兩者のものが同時には公表せられてゐるが、

DAY はまだ経験の積まないと云ふ點があるやうで、BREKER は既に経験が積んで後に公表せられたものである。それ故ベラ類の方は DAY の方が、テンジクダイ類の方は BREKER の方が優れてゐるやうな感じがある。それは個体變化を注視してゐると否とにある。

動物學者も植物學者も、生物には遺傳と個体變化とのあることを熟知してゐるに拘らず、分類學者は兎角個体變化を忽にする傾向がある。是れをどう取扱ふかと云ふことが分類學上最も大切で、最も困難な問題で、私は是が爲め十ヶ年間苦心し、漸く是を私自身に氣に入るやうに完成し、近日動物學雜誌へその全部を公表する考へである。固より是とても學說であるから、多くの學者から嚴正な批評を受け度いと思つてゐるが、私は是れに基いて研究しない限りは何時まで年月を経過しても際限なく、争ひを続け、決して結末の付かない處があると思つてゐる。

つまり私の分類は生物には遺傳があると同時に個体變化の伴ふことに重を置いたものである。

今日鮭鱒類の研究は米國で最も活潑に續けられ、殊にそ着ける様に努力すべきもので、若し私の説が誤であると自覺し得れば何時でも自説を放棄する用意を持つてゐるがさて他説を容れると云ふ點に達してゐないのは残念である。それ故私としても出来る限り努力してゐるつもりではあるが、何分にも鮭鱒だけに打ち込んで研究することが出来ないし、他の分類學者も恐らく片手間仕事である場合が多いやうで、研究が思ふやうに進まないのは残念である。鮭鱒類を研究するには色々の方法もあらうが、基礎の部分を數年間みつちりと年中研究する篤志者が欲しいものである。殊にその内でも分類學だけは早く研究を遂げ度いものである。

是を研究するには曾て私の云つた通り、各種毎に二萬尾位集め（これによつて各地から、又各時期から集められる）野外の研究も充分に行ふべきであるが、何分にも鮭鱒類には大きい形のものが多いから、澤山の標品を研究室へ運ぶことの出来ないのは残念である。外國でも大形の標品は澤山に研究室に保存せられてゐない。

鮭鱒類は澤山に入手し得られ、何時でも研究せられるも

の太平洋岸のものは十數年間研究を續けられてゐるため、種々の立派な文書が出版せられてゐるに拘らず、案外、實質的の效果の學がつてゐないやうに思はれるのは分類學の基礎が確立してゐないことに大に原因すると私は思つてゐる。

鮭鱒類の學名の研究は至極よい。然し學名そのものは寧ろ各種を明かに認識する爲めの一方法に過ぎないものであるから、餘り學名だけを八釜しく云ふと、色々と手違ひを生じ、分類の根本義を離れる恐もある。これは學名の選定が命名先取權によることゝなつてゐるが、學名に對しての記載が不完全で、特別の何種であるか鑑定し難い場合が多い爲めである。

また、種々の學說と云ふものが併立する場合が多く、全く反對に考へられてゐる場合も相當に多い。斯様な場合には各説に對してそれを賛成するものもあつて、諸説互に争ふはいゝとしても、定説に落ち着かない場合も多い。鮭鱒類の學名や種別に對しても色々の説があるから、何れが眞相に近いかに俄に判断しがたい。是等は成るべく定説に落ちるのであるに拘らず、まだ研究が纏まつてゐない。是を纏めるには相當の費用と多くの研究者を要し、その研究者も片手間仕事でなく、年中是に打ち込んで研究し得るやうな手配をしなくてはならぬ。

我國でも外國でも鮭鱒類の研究はまだ不完全で、何れの種類を取つても研究が完成に近づいてゐない。

## 鈴木牧之著北越雪譜を薦む

理學博士 藤田 經 信

鈴木牧之著北越雪譜が岩波文庫の一冊として最近岩波書店から翻刻された。

私は青年の頃から雑文學を耽讀するの趣味があつて、いつのころか上野圖書館あたりでこの北越雪譜を一讀した。全く見も知らない北越の雪景は勿論七不思議などお伽話めいたものが書き綴られた内に鮭の話が克明に表現されてゐて面白く有益だと感銘した。北海道に在住して鮭については一層親しむことゝなつて見ると更に北越雪譜を再検討するの必要を痛感した。しかし上野圖書館なら格別地方の圖書館あたりではこんな珍籍を藏する筈もない。そうなるといよゝ熟讀したい念慮が昂まるばかりである。私の住宅が東京にあつて時々上京するのでその都度必ず本屋を涉ることゝした。多くの稀書觀籍も探つたが北越雪譜もその一

であつた。いつであつたか本郷の古本屋で漸くその一部三冊を發見し百年の敵に邂逅したやうな喜びを湛へて購入し北海道帝國大學水産専門部に收めた。その後時々鮭に関する記述を反復翫味した。ところがこれも何時であつたかこの珍籍が忽然春の淡雪のやうに永久に消え失せた。幸にその重要な記事だけは抜萃して置いたので参考には遺憾が少かつたが、かゝる貴重な圖書の紛失は寔に痛恨の極みであつた。

岩波書店よりその文庫本として北越雪譜の刊行されたと新聞廣告を見て直に購讀したが以前よりなほ新事實に直面して一層本書の眞價を認識せざるを得なかつた。

著者鈴木牧之は從來の刊行本では全く閑歴の不明な人物であつた。従つてその著書に滿載された有益の記事も眞實

の評價が容易に下しがたかつた。しかし岩波文庫本には鈴木

と同郷の岡田武松（氣象學者？）の鈴木に關する閑歴が明記されてゐるから同人の著述は架空談でなく漫遊談でもなく郷土誌の斷片と諒解されて寔に千金の價値がある。

鈴木牧之は現今の新潟縣南魚沼郡鹽澤町の人で郷黨では夙に名聲があり當時の文豪、馬琴、蜀山人、京傳等とも親交があつて詞藻にも富んでゐた。ことに京傳の弟京山とは懇親であつて本著についてもその贊助を得た、それがため北越雪譜もワルトンの釣魚全書のやうに文藝的の序述はな

いとしても筆意が暢達して通讀に適してゐる。北越雪譜は初編上中下、二篇春夏秋冬四冊、合計七冊で初篇の上巻は天保六年の刊行、二篇の冬は同十三年の刊行でその間七年を要した。當時僻遠の地で著述するの勞苦は寔に察するに餘りある。鮭（本書にはこの字を用ふ）の條は初篇の下巻で天保七年に刊行された。鮭に關する記事は左の十項である。

鮭の字の考、鮭の食用、鮭を出す所、鮭の始終、打切り並につゞ、搔網、漁夫の溺死、總瀧、鮭漁の類術、鮭の洲

走り。

北越の鮭に關する約百年前の見聞記はこの項中に壓縮されてゐる。これを精讀翫味すると當時の鮭漁況が夢か幻かの如く眼前に展開する心地がする。

私が特に北越雪譜を推賞するのは「鮭の始終」の條末に附記した著者の卓見である。

牧之常におもへらく、寒氣の頃捕たる鯛と男魚の白鯨とをまじへ、鮭居る川の沙石に包み、瓶のやうのものにうつし入れ、鮭なき國の海に通ずる山川の清流にかの瓶にうつしたるはらゝご沙石のまゝさけのうみつけたる如くになしおき、此川にて鮭いでくとも三年捕る事を國禁あらば鮭を生せんもしるべからず、生せば國益とならん。是は現在の人工受精孵化法と全く吻合した意見で著者の見識の高遠なる洵に驚嘆すべきである。この著想は白魚に發したるにや前條下に細書して「江戸の白魚はむかしそのたねをうつし玉ひしとぞかゝつるためしもあればなり」と附書してある。

北越雪譜の水産界より推賞するに價値ある問題は鮭の人

工孵化である。この法の實踐されその結果の公表されたのは一七六三年（寶曆十三年）奥國陸軍士官ヤコビーであった。この事實は當時甚だ興味を以て斯界に歡迎されたがまだ決して事業化はされなかつた、それを事業化するに邁進したのは佛國の一漁夫レミーである。同人は一八四一年、（天保十三年）即ちヤコビーの事蹟公表後五十六年で孵化業に着手した。その効績は後政府で表彰されて年金の下賜となり、その業務は國立孵化場の設立を示唆した。

鈴木の考案たる鮭孵化法は歐洲でもまだ實行普及されないう天保七年（一八三六年）或はその以前に著想されたもので全く獨創である。明治九年米國から關澤明清が鮭人工孵化法を傳習したので我國はその年以來この方法が創められたと考へるものが多いがこれは自國の事情に味いことである。もし我國で鮭が外國のやうに産額が少く高價を博したなら早くもその人工孵化法が講究され普及されたらう。我國の鮭は僻陬に多産しその價も安廉であつたため從來人工孵化の必要を認めなかつた。この法は實際明治十年着業されたが同二十二年北海道廳で千歳孵化場を開始するまで斯

## 資 料

## 越後の色鯉とその飼育法

新潟縣水産試験場 越 田 秀 包

## 一、越後の色鯉

生物進化の原則に従つて環境による鯉の地方的變異には十數種もあるであらう。越後の色鯉は形態的に色彩的にその特徴が最もよく發揮され、誰が何といつても世界に誇り得る尤物である。金魚の室内的なるに反し庭園の飼育魚として遙かに似つかはしく、池泉水園の觀賞魚としてあの艶麗な色彩斑紋、清楚にして優雅な容姿は全く美の極致といつてよい。

色鯉は眞鯉を除く變り鯉模様鯉の總稱で、動物學上から見れば眞鯉の一變種で、チュウリツプ牡丹と共に新潟縣副

業の須要を痛感しなかつた。二十二年以後は一般に鮭の生産が減額した爲こゝに孵化法が新生面を開いたのである。それゆゑ天保年間の事は推して知るべきである。この時鈴木の考案はこれが事業化される機運に到らなかつたが實に千鈞の重があつて我水産史に特筆すべきである。

北越雪譜は北越の寒天を語る隨筆である。その中に陸離たる光彩を放つ養殖談を聞くのは漢々たる凍雲を排して朝暉を拜する想がある。

苟くも養殖、ことに孵化事業に關心を持つものは敬虔の心を以てこの先人の空前なる卓識に感謝すべきである。

業界の双璧である。何れも「直接人類の福祉に寄與する所尠し」と云ふ向もあるが、我が國民性を顧るとき色鯉の觀賞より來る人間性の陶冶に絶大な効果を齎らし、必ず人心の緩和と家庭生活を潤美ならしめる。

越後の養鯉は起源頗る古く元和の昔、今より三百年前蒲原郷結新田―現在新津町在稗川が開墾された當時に創り、色鯉の主産地山古志二十村郷（長岡市を距る三、四里以上の山間部落）では天明時代灌漑用溜池を利用して鯉を放ち文化文政の頃には既に緋鯉、白鯉の人工飼育をなし之れを觀賞し、變り鯉の出現に興味をそゝられて研究を重ね、

天保年間には遂に紅白の鯉が出来、明治七、八年頃一時流行を極め相當優秀魚も生産されたが、投機事業なりとして縣の忌避に觸れその養殖は禁ぜられ頓挫した。後禁令も解消され白地に紅黒の三色鯉も生れたが一進一退のまゝ彼の八大傳に有名な鬪牛と共に郷民唯一の娯樂に過ぎなかつた。然るに明治三十年頃郷の名望家平澤彦三郎氏は之を遺憾とし廣く世に紹介して販路を拓かむと謀り、大隈伯に贈つてその庭園に放たれ痛く世人の注目を惹いた。これが抑々色鯉を世に紹介した第一歩である。

其後大正三年大正博覽會に出品して二等銀牌を授賞され内八尾は長くも皇太子殿下に献上し御嘉納の榮譽に浴したこれを機會に貴紳にも贈つて次第に世に知られ、大量商取引も始まり、茲に郷内愛鯉家は著しく活氣を呈し飼育復活の端緒となつた。爾來眞劍に實驗を重ね複合交配を繰り返し専ら珍種の作出、優良種の淘汰、品種の固定等に努め、優秀な紅白、色彩鮮かな三色鯉、黄移の多産系、白移、白別光、大正三毛を、昭和になつて黒地に三色の昭和三毛、淺黄三毛等が作られ、好事家は白移から變化した斑白移、

究されたものもあるが、色鯉に關して未だそれがなく、色素胞の種類と形状性質、成長に伴ふ褪色現象とその特質、色彩斑紋の遺傳其他の研究と推考その應用は今後に殘された學界の問題である。

呼稱は二十餘種にも及ぶが、觀賞用として人氣のある品種は紅白、大正三毛、昭和三毛、白移、黄移、白別光、淺黄三毛等で、中にも紅白、三毛、金銀鱗種が最も世人に歡迎される。色鯉は近來花鯉又は錦鯉の名稱で超スピード的に全國の趣味家の注目を集め、帝都では朝倉文夫氏の主宰される錦鱗會、松岡賢靜氏提唱の下に全國の愛好家を糾合しての日本愛鯉協會等が結成され、明治神宮、日比谷公園其他東都を始め廣く全國の池泉に放養してその水園美化運動が起り、或は日本の誇りとして遠く海外に輸出されるなど萬丈の氣焰を擧げてゐる。

今や多少他府縣にも生産されるが、あの鮮麗な色彩斑紋や優美な容姿は全く越後就中山古志郷独自の生産物で決して他の追従を許さない。土地水質等の特性にも據らうが、永年に亙り郷内有力者が不斷の誘掖によつて「色鯉を愛養

黄移の變色した黒黄斑鯉を、次で淺黄系からの藍衣、墨衣等の新珍種が愛養されてゐる。

養鯉家の鯉を愛すること又格別で、主産地二十村郷などは鯉を家族の一員或はそれ以上に遇し、本邦隨一の降雪地方とて一丈五、六尺乃至二丈三、四尺にも及ぶ關係もあらうが、冬期は全く鯉と共同生活を營み、優良品を得たい一念からその飼育にはあらゆる犠牲を惜まぬ態度は、會心の傑作を得る爲め粉骨碎身する名工の苦心に髣髴たるものがある。系統の正しい素質のよい親魚には伊達櫻、美濃柿等の雅名を附して愛し、其他色彩斑紋の位置によつて丹頂、鞍懸、初牡丹、龍田川等の雅名を以つて呼んでゐる。

色鯉は多年に亙る愛鯉家の苦心により色彩は多種多様で已に固定したものもあるが、珍種を得ようと種々交配の結果、偶然變異又は彷徨變異によつた一代變種も多く、中にはメンデルの遺傳法則を超越した奇蹟的な出現もあり、單に皮下の色彩斑紋のみ一時的に出現消滅變色等の變化があつて全然別種の觀を呈するなど相當雜然たるものがないでもない。魚類の体色に就いて金魚メダカ等幾分科學的に研

する事が天恵に薄く交通不便な半歳の長き雪に埋もる山村部落を繁榮に導く唯一の途である」といつた堅い愛郷の信念が深く郷内に培されてゐる賜物だと信ずる。昭和九年には所によつて積雪二丈四、五尺に及び越冬中大切な親魚や立魚を數多壓死又は窒息せしめ、剩さへ崩雪の爲め溜池生洲は破壊されて十六、七萬圓の損害を蒙り、引き續き變態的不順な冷温に生育不良に陥り著しく生産を減じ例年の四分の一に過ぎなかつた。然し郷民は稀有の凶作に喘ぎながらも色鯉に寄せる熱烈な意氣と愛着はよくこの災禍を克服して美事な色鯉を更生せしめた。十年度はその生産を増加し販路を擴大したのに一昨年にも増して今年の豪雪と寒氣には未だ四、五尺以上一丈の殘雪に悩む二十村郷を始め一帯の被害夥しく雪害高六十萬圓を超えたと云はれ氣の毒に堪へぬ。

越後独自の色鯉は十月下旬から十一月初めにかけて飼育池に灌漑用溜池から取揚げられ、十一月中主産地を始め各地で養鯉家の逸品を一室に網羅陳列して品評即賣會が催され、當業者の比較参考に供し、以つて生産技術の練磨に資

し、同時に觀賞を江湖に勧め郷土色鯉の聲價發揚に努めて  
ゐる。従つて此の時期には東京、京都、富山其他各地から  
多數の愛好家が入り込み非常な賑ひを呈する。

尾崎行雄氏の句に

鯉の色鬪ふ牛の技よりも我は愛でけり虫龜の秋

### 二、種 類

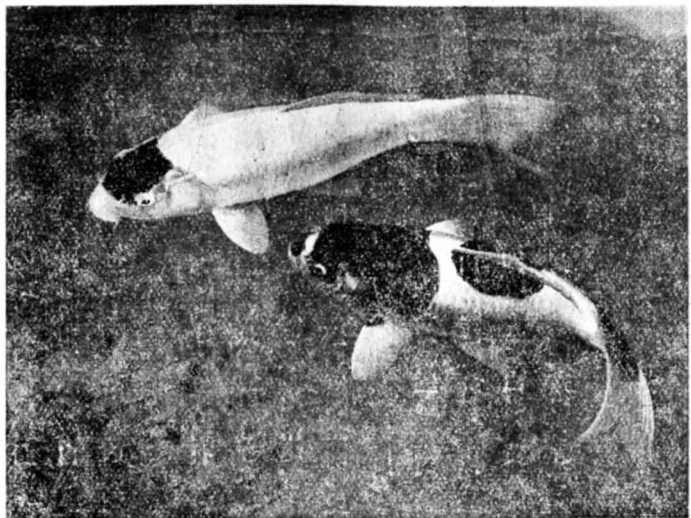
世人に嗜好さるゝ品種を列記せば

紅白 更紗とも云ひ白素地に紅色の色彩斑紋あるもの、色  
彩濃紅にして斑紋の配置よく鮮明なるは頗る優美である  
三毛 三色ともいひ白地又は淺黄地に黒紅の色彩斑紋あり  
各鰭下腹部白く、時として紅色を缺くこともあり、全身  
に小黑點を生ずる缺點がある。

大正三毛 三毛に酷似し素地純白、黒模様は漆の如く黒く  
紅色又鮮かにて白紅黒の色彩鮮麗。

昭和三毛 白移に紅色斑紋あるもの、一見大正三毛に似て  
ゐるが黒素に白紅模様あるもの。

白移 白寫とも書き黒素地に白模様あるもの、又白地に黒  
斑紋のものもある。黒色に墨黒と漆色とがある。



上 下  
丹 伊  
頂 娘

大 正 三 毛



黄移 黄寫とも書き黒地に  
黄模様又は黄地に黒模様  
のものもある。

淺黄 全身淺黄色のもの淺  
黄地肌により紺上、海鳴  
ゴミ等に分れ頭部、鰓  
蓋、腹部、鰭に紅色彩あ  
るもの賞揚され、最近紅  
黒白の三色模様あるもの  
現はれ淺黄三毛と稱し珍  
重される。

別光 鰓甲とも書く、三毛  
及大正三毛より出で赤別  
光、白別光、黄別光の三  
種があり何れもその地色  
に黒模様あるもの。

金鱗銀鱗 何れの種類にも  
生じ、其多寡により一段

と光彩を放ち世人に歡迎さる、特に紅白大正三毛に多い。

### 三、飼 育 法

採卵孵化 親魚は秋池揚げ後生洲（湧水地域に幅九尺、  
長二間、深三、四尺餘の切石積み、コンクリート造り又は  
板圍とし、或は同様に圍ひ底部は粘土にて固め水漏れを防  
ぎ底面に小砂利を敷き湧水を引き水深一尺五寸位となした  
るものを各戸に數個宛備へ、之れに親魚及優良魚其他を區  
劃して收容越冬さす）で冬圍し、四月に入れば産卵孵化に  
充てる稻田溜池附近の積雪を排除して作業に便じ、潰田螺  
を與へて生殖素の成熟を圖り、五月に入り八十八夜前後と  
なり天候の定まるを見越し、暖かき日に雌魚を産卵池（主  
として灌漑用溜池）に放養し數日を経て雄魚を放てば四五  
日後に産卵する。

親魚は觀賞を主眼とせず優良形付魚の多産系を貴び、従  
つて特に系統を選び由緒正しく素質よきものを使用する。  
就中紅白鯉にあつては雌魚は紅白斑紋が薄くとも白素地に  
確然と存し斑紋中魚鱗に紅色の滲み込んでゐるかに見ゆる  
ものを、雄魚は素地の純な紅色斑紋の多く且つ濃厚なもの  
を選ぶ。大正三毛鯉は三毛の雌雄を配合すると紅白の雌

に三毛の雄を配する場合とがある。前者の場合は三毛の生産多きも優良形付魚の出来少く素地に黒點の生ずる傾向があり、後者の際は特色ある三毛の生産少く斑紋崩れ多き代り紅色黒色の色彩斑紋の鮮麗濃厚な觀賞價值大なる優秀魚が生れる。

昭和三毛は未だ固定せず白移若くは白別光の雌に紅白の雄を配して得られるが多くの産出は望まれぬ。

産卵に當り魚巢は日蔭藪又は杉の小枝を數本束ねて池邊水深四、五寸の處に突き挿し之れに産着せしめ、之れを孵化池（主に稻田を使用する）に移し孵化後四、五日を経て魚巢を取り揚げ豫め蕃殖せしめて置いた天然餌虫を掬ひ集めて給餌し、又は餌虫蕃殖池に坪當四、五千尾程度に放養し、体長二種に成長せば掬ひ取り体形整はざるを捨て六月十日以降飼育池又は田植後の稻田に移して成育を計り又は販賣する。或は雪消えを待つて生洲より灌漑用溜池に親魚を放しそこで産卵せしめ、魚巢の大半を孵化池に移し（他は其儘放置親魚其他と共同飼育し、秋落水して收納する）孵化後四、五日過ぎて麥粉を糊狀に煮て池邊に撒布し次で

生洲に移し越冬せしめ或は販賣する。池揚時の形付魚歩留は一孕に對し大約二千尾内外となり、特殊優良魚を除いた一、二割の並上魚、三四割の並魚他に雜物が生産される。翌年の飼育用種苗は當歳秀逸魚を除いた優良魚と並上魚が當てられ池揚時當業者間に取引される。

二三歳魚の飼育 秋取揚げ生洲に收容後翌年三四月迄は時々大麥或は麵類を煮て極少量宛與へ、四月中旬より潰田螺を混合する。五月に入つて生洲より飼育池―灌漑用溜池に二三歳魚を假りに水面三十坪に對し五十尾の割とし三歳魚二割、二歳魚八割程度に放養し、同月中旬より一日一回潰田螺に琴虫、鹽虫、蛹を混じて少量を、六月、一日二回宛時に煮麥を混ぜ、七月に入つては放養數百尾に對し一日一升、八九月の候一日一升五合を、十月になれば給餌量を減じ一日一回蛹のみを給與して冬期湧水部に冬圍する關係上魚体の減耗を防止する。十一月上旬池揚げ後は動物質を廢し煮麥のみ少量宛與へる。

取揚時の体形は二歳魚二十五種乃至三十種、三四、五、十瓦乃至四百五、六十瓦、三歳魚四十種、平均一疋となり

麥粉四・〇、米糠四・五、蛹細粉一・五の割合に混合煮餌としたるを天候水温に應じ最初は極少量宛を成長に連て漸次其量を増し、大凡そ二十日後体長二種となり六月十日過ぎ取揚げて挿秧後の稻田に放養する。取揚魚兒は雌魚の大小と管理にも依るが一孕から一萬五千尾乃至三萬尾を得る。

稚魚の飼育 体長二種の青仔は坪當り二十五尾（二十坪に對し大約五百尾見當）放養し七月二十日頃体長六種内外に及んで取揚げ第一次撰別として白無地赤無地及價值なきものを除き、形付魚（模様ある魚）百尾内外を淘汰する。之を更に坪當り二十五尾程度に放養し鱒に蛹を等半に混じ炊餌として與へ、八月下旬より九月中旬頃第二次撰別を行ひそれ〴〵特色あるものゝみを採り觀賞用價值なきもの一割五分乃至二割以上除去し、更に坪當り十尾内外に再放養し時に秀逸魚は分養しその色彩斑紋を鮮麗濃厚ならしむる様精根を盡して愛養する。中には八月下旬第二次撰別後更に九月下旬第三次撰別するものもある。斯くて十月末より十一月初め鯉兒は成育して十種以上十八種となり稀に二十四種を超す。此時池水を排除して取揚げ更に撰別淘汰して

秀逸魚は稀であるが内一、二割の並上魚他は一般向きの觀賞魚が生産される。

總て色鯉飼育には普通の食用鯉の如く給餌を多くせず成るべく少量に與へ粗放的にせないと良好な色彩ある色鯉の生産は望まれぬ。

#### 四、色鯉の撰別

色鯉は食用（眞鯉と何等肉味に差異なく洗ひなどにはかへつて肉に淡紅色があつて喜ばれる）が目的でなく觀賞を主眼とするから出来るだけ美しいものを育て新たな品種を作り出さうとする。従つて親魚は素質のよい系統正しい地肌の純な色彩斑紋の濃厚な優良種を選び、稚魚時代に數次の淘汰撰別の手数を拂ふ。五月十日頃産卵せしめた孵化稚魚は六月中旬挿秧後の稻田に放養して青仔に成育する。發生當時の稚魚は乳白色で眞鯉と變りなく唯幾分卵黄色を帯びてゐる。生後十五日頃より逐時黄色を増して橙色となり、二十日頃には橙色に赤味を帯びた素地に黄橙色斑紋の潜在するのが認められ、三十日目頃斑紋の地肌に現はるゝもの未だ皮下に潜在するもの、或は素地の橙色褪色して白色と

なるもの、又は未だ素地橙色のまゝなるものなど稍變化を生じ五十日頃迄に橙紅色の地肌に黄橙色又は黒の斑紋を現はすに至る。そこで七月中下旬六種内外に成長すると大体以上の如き色調が現はれて来るから第一次選別をなし形付魚黒地魚及特異のものをとり体形整はぬもの及赤地白地其他のものは淘汰して捨てる(雑物は俄助煮、昆布巻、鱒詰に加工利用する)。

緋鯉系の紅白、三毛、別光又眞鯉系の昭和、黄移白移、浅黄等によつて褪色現象が一樣でなく相異なるは勿論である。孵化後六十五日乃至九十日の間に於て最も著しき變化を起し色彩濃厚となり斑紋判然するもの、素地變色して濃くなるもの、地肌褪色して無地となるもの、或は素地に變化なく斑紋消滅して赤白無地となるもの、斑紋の出現消滅の中間を辿り赤無地又は白無地何れかに變化せむとする徴候あるもの等著しき變化をなしつゝ特有の色調が現はれ始める。九月中旬以降になれば色彩は濃厚となり斑紋は判然し褪色變化するものは種々雑多な過程のもとに變化して各種類それづゝに特異の色彩を現はす。その特色あるもの、

差支ない。要するに二次的に出現した紅色は變化し易い。

五、價格と販路

色鯉の販賣は周年行はれるが、その飼育は一部を除き總て稻田溜池飼育なると、積雪多き山村の副業なるが爲め販賣の期節は池揚後の十一月初旬より十二月中及三月末より七月初の二期に分れ、大量の商取引は前期に行はれこの期間生産各地方で品評即賣會が催され、後期は蓄養魚及稚魚の販賣に止り量は多くない。

價格は毎年五六月頃最高となり十一月、十二月の池揚げ直後は安價である。觀賞魚なるが故に年に依り四周の情勢に

みを選別して更に色彩を濃厚鮮麗ならしめる。十月下旬の取揚げに際しても未だ色調は定まらず良否の區別選擇は容易でない。

最も注意を要する點は配置よき模様を有し觀賞價値あるものでも紅白、三毛の眼の周圍に吻鰓及腹部に赤色若くは黄色あるものは何れも成魚となつて全身赤變する虞れがある。大正三毛の素地浅黄色なるは二歳魚となつて色彩鮮かに、黒色及紅色斑紋中に白き透きあるは模様變化の徴にして、當初尾鰭に黒縞あるを可としたが後に至り背部に黒點を生じ觀賞を害する傾向ありて近來嫌はる。紅白の素地桃色なるは捨てるに及ばず斑紋の間に黄斑點あるは白素地の赤變し易く、眼の周圍黒きは成魚となつて黒星を生じ、其他背筋に黄色の細長き流れ模様あるは觀賞上面白きも遺傳せない。紅白の成魚に黒點を生ずることあれどそれは單に星であり若し鱗片の黒變せるは既に三毛に變化した證である。兩眼の周圍浅黄色又は濃紅色を呈するは概して浅黄色又は三毛系の鯉より生れ其色は永く保たぬ。白移の白素地に黄色の斑點現はるゝは黄移に變化しつゝある徴と見て

従つて一定せず、色彩斑紋の鮮麗優雅にして模様の絶對的なるを優位とし其差甚だしい。優秀な逸品に至つては骨董品的高價を稱へ、當歳魚にて一尾よく四、五十圓と評價され、二、三歳魚にて四、五十圓以上百圓に達するものも珍らしくない。著名な親魚の如き數百圓を稱へても却々手離なさうとせない。

主産地二十村郷秋期池揚時の最近三ヶ年平均した地渡し相場は大約次の如く見做される。並魚以上は總て一尾値段にて、目方賣りは並魚以下のものに限られ、移出相場は一貫匁に付金七圓、五圓、四圓位の三段に行はれてゐる。

品種	當歳魚			普通魚			二歳魚			三歳魚		
	秀逸魚	優良魚	並上魚	中魚	並魚	魚	秀逸魚	優良魚	並上魚	並魚	一貫匁魚	
紅白	二五〇-四〇〇	五〇〇	一三〇	二〇-五〇	三〇-五〇	三〇-五〇	五〇-一〇〇	一〇-三〇	二一五	三〇	三・五〇	
大正三毛	二五〇-四〇〇	五〇〇	一三〇	二〇-五〇	三〇-五〇	三〇-五〇	五〇-一〇〇	一〇-三〇	一一五	三〇	四・五〇	
昭和三毛	二〇〇-四〇〇	五〇〇	一三〇	二〇-五〇	三〇-五〇	三〇-五〇	五〇-一〇〇	七二〇	三二五	三〇		
白移魚	一〇〇-二〇〇	三二五	一三〇	一〇-五〇	二〇-五〇	二〇-五〇	二〇-五〇	一〇-三〇	〇七三	三〇	一・〇〇	

販路は古くから京都を主とし大阪岐阜富山福井金澤地方で賞翫され、近來東京を始め愛知長野山形秋田福島岡山廣島熊本等の府縣に移出され、歐米諸國へも輸出される。

優良魚は縣内外の特殊好事家に觀賞され、一般に縣外移出は京都を除き次位品であつたが色鯉趣味の普及につれ次第に良品の搬出が多くなりいつも品不足を告げてゐる。

# 各種鱒稚魚の酸素消費量に就て

農林省水産試験場  
木崎分場

畑 久 三

鱒の種類に依つて、水中に溶解する酸素の消費量に差異ある事は自然想像されるので、昨年の一月初から鱒の單時間に消費する酸素量と、水中に溶解する酸素を鱒がどの程度まで使用する事が出来るかを色々の水温で、各種の鱒に就て比較して見たがまだ完結した譯ではないけれども、試験の一部を取纏めたのでその概要を述べて見たいと思ふ。

試験に使用した稚魚は、姫鱒、木崎鱒、河鱒、虹鱒の四種で孰れも木崎湖で漁獲した親魚から得た發育程度の殆んど同じ臍囊吸收前のものである。

試験の方法は、誠驗用水を充した容量100cc入の共口瓶二個宛を、温度を調節した恒温槽の各室に懸垂し、共口瓶の温度が槽の温度と略同一温になつた時、二個の中の一個

に一定数の魚を入れ密栓し、他の一個は其まゝとして試験終了と同時に、ゴム管によつて各瓶より容量100cc位の酸素定量用共口瓶に採水、ウインクラウ氏法によつて酸素量を測定し、兩者の差を供試魚が消費した酸素量とした。

次の第一表は、魚體一瓦の一時間に於ける消費量を現した結果であるが、各鱒共概して酸素消費量は温度が昇るに従つて増加し、又種類別にては、形の大なるもの程、消費量の増加するのを見た。この現象は魚體一尾に就ても同様であつた。

即ち姫鱒の酸素消費量は水温17~18℃位迄は、温度の上昇に従つて直線的に増加し、他の種類は増加の程度割合に緩慢であるが、孰れの種類でも17~18℃をこすと魚の

第1表 水温に依る各種鱒の單時間の酸素消費量表

魚種	0.996 gr			0.183 gr			0.064 gr			0.171 gr		
	水温 °C	1尾時間 in Vol.%	1尾時間 in Vol.%	水温 °C	1尾時間 in Vol.%	1尾時間 in Vol.%	水温 °C	1尾時間 in Vol.%	1尾時間 in Vol.%	水温 °C	1尾時間 in Vol.%	1尾時間 in Vol.%
1	20.0	0.0256	0.266	20.1	0.0359	0.196	19.0	0.0108	0.169	22.9	0.0375	0.219
2	18.2	0.0249	0.259	18.1	0.0376	0.205	17.3	0.0115	0.180	19.9	0.0415	0.243
3	15.8	0.0229	0.237	15.5	0.0281	0.153	15.0	0.0074	0.116	18.4	0.0419	0.245
4	13.9	0.0222	0.231	13.9	0.0259	0.141	13.0	0.0069	0.108	16.8	0.0380	0.222
5	12.0	0.0195	0.203	12.0	0.0235	0.128	11.8	0.0066	0.103	15.3	0.0387	0.226
6	10.4	0.0177	0.184	10.5	0.0233	0.127	10.2	0.0053	0.083	13.0	0.0309	0.181
7	8.8	0.0161	0.167	8.5	0.0209	0.114	8.8	0.0050	0.078	11.9	0.0405	0.237
8	6.9	0.0128	0.133	6.7	0.0127	0.069	7.0	0.0042	0.066	9.5	0.0325	0.190
9	4.9	0.0100	0.104	3.2	0.0085	0.047	5.0	0.0042	0.066	8.0	0.0322	0.188
10	2.0	0.0070	0.072	1.5	0.0078	0.042	2.0	0.0025	0.039	5.7	0.0318	0.186

生活條件に悪影響を與へるものと見へ、水中の酸素を使用する力が低減して却つて酸素の消費量減少するのである。之等の鱒の消費量を比較すると、容器内に於ける動作活潑なる姫鱒、虹鱒は消費量最大で、動作の静かな河鱒最少であるが、要するに種類による魚体の大きさの差がかかる結果を來すものと思はれる。

述べるまでもないが、水中に溶解する全酸素を魚が完全に消費する事が出来ないで、次第に酸素を消費して、既に魚が窒息する場合にも水中には多少の酸素が残存する事は勿論である。この残存程度が魚種別及水温により、どれほどの差異があるかを知る爲に、同一瓶中の供試魚全部が横臥し、錫蓋の閉閉を停止したる時の残存酸素量を測定して鱒の種類によつてどの程度まで溶解酸素を使用するかを試験した結果を第二表に掲げる。

さきの試験では温度が高くなるに従つて消費量が増加したけれども、此試験では第二表に見る様に温度が昇るに従つて酸素残存量が増加してゐる。即ち温度が高くなる程溶解酸素を使用し難くなることを示すものである。更に各種

類の残存酸素について見ると、河鱒では  $11 \sim 13^{\circ}\text{C}$ 。迄は、その量が殆んど同じであるがそれから急に増加し、木崎鱒では  $14^{\circ}\text{C}$ 。迄は同じ状態が進んでゐるが、 $15^{\circ}\text{C}$ 。をこすと急に増加するのである。姫鱒は  $16 \sim 17^{\circ}\text{C}$ 。邊りから増加し、是等の種類の中で範圍最も廣いのである。是は種類によつて温度による溶解酸素を使用する力が、或温度まで温度の上昇に従はずに同じ程度に進行するもので、その範圍の廣狭によつて、その魚の性質に強弱があると云ふ事が云はれると思ふ。水中の溶解酸素量から残存酸素をさしひいた残量即ち斃死に至るまでの酸素消費量は、温度の高くなるに従つて減少するもので、種類別による最多消費量は姫鱒である。各温度に於ける致死に至る迄の時間は、温度の上昇に従つて短くなるのであるが、姫鱒は他の鱒に比べ各温度に從つて生存時間が長い様である。

以上述べた二つの試験から次の様な結果が得られた。即ち單時間内に於ける一瓦に對しての酸素消費量と、斃死に至る迄の酸素消費量は姫鱒が最大で河鱒が最小である。換言すれば水中の酸素を使用する能力は姫鱒最良で、河鱒最

第2表 水温に依る各種鱒の致死酸素量表

魚種 平均体重	0.096 gr			0.184 gr			0.066 gr		
	水温 °C	O <sub>2</sub> 含有量 in Vol. %	残存O <sub>2</sub> 量 cc	水温 °C	O <sub>2</sub> 含有量 in Vol. %	残存O <sub>2</sub> 量 cc	水温 °C	O <sub>2</sub> 含有量 in Vol. %	残存O <sub>2</sub> 量 cc
1	19.4	0.569	0.072	19.6	0.571	0.085	20.2	0.517	0.115
2	17.3	0.575	0.051	17.5	0.579	0.078	18.2	0.551	0.109
3	14.9	0.585	0.046	14.5	0.583	0.052	15.7	0.567	0.100
4	13.0	0.585	0.043	13.0	0.591	0.053	14.0	0.574	0.100
5	11.0	0.601	0.041	11.0	0.603	0.049	12.0	0.587	0.083
6	10.0	0.601	0.035	9.9	0.604	0.044	11.0	0.590	0.076
7	8.0	0.601	0.042	8.0	0.614	0.051	9.9	0.594	0.076
8	5.8	0.617	0.036	6.0	0.615	0.046	7.0	0.596	5.076
9	3.9	0.617	0.036	4.0	0.625	0.038	5.1	0.603	0.076
10	1.2	0.640	0.038	1.0	0.636	0.059	1.5	0.622	0.072
			全致死 時間			全致死 時間			全致死 時間
			3.56			4.00			4.20
			∥			3.40			3.25
			5.14			4.30			4.50
			6.30			5.05			5.30
			7.05			5.45			5.45
			11.25			7.55			6.05
			∥			8.52			8.30
			∥			11.07			9.30
			20.30			15.32			12.35
			22.35			20.07			16.30

悪であると云ふ事が云へるのである。次に各種鱒をその適温範囲外の高温度に生活せしむるとき、鱒の生活条件に悪影響を與へるのは、

(一) 水温が上昇するに従つて酸素消費量が増加すること

(二) 水温が上昇するに従つて溶解酸素の使用能力が低減

すること

(三) 水温が上昇するに従つて水中への溶解酸素量が減少すること

(四) 鱒の種類によつて酸素の使用能力に差異あること等が原因することを如上の實驗結果から云ひ得るのである。

### 鱒 卵 の 分 譲

栃木縣養鱒協會では左記に依り本年度鱒卵の分譲をなす由に付、購入希望者は購入數量、發送希望月日、發送先到着驛名(線名記入のこと)發送通知先等併記の上、直接同協會(栃木縣宇都宮市栃木縣廳内)宛申し込まれるべし。

記	
一、分譲數量	河鱒卵 四〇〇万粒 虹鱒卵 三〇〇万粒
一、分譲價格	河鱒卵 壹萬粒に付賣地驛着値 虹鱒卵 金參拾五圓也
一、分譲月日	河鱒卵 十一月上旬より十二月上旬まで 虹鱒卵 十二月下旬より正月下旬まで

### 彙 報

#### ○北海道養鱒組合の設立

本道に於ける養鱒事業は、近時次第に盛況を呈して來たので、相互の連絡を密にし斯業の發展と共榮共存とを圖る必要を認め、上川養魚組合が發起し首題の組合が創立された。本協議は去る七月十七日旭川市に於て行はれ左記の役員が決定した。

本組合員は現在ヤマベ養殖を行ふ者に限られてゐるが漸次他の鱒類を養殖する者の加入を求め將來は一般的に淡水魚の養殖業者の参加を期してゐる。

- 組合長 明石幸輔(上川養魚組合代表)
- 副組合長 吉野武者二
- 理事 田中憲房

#### ○北海道湖沼養殖研究會の開催

去る七月二日大沼に於て大沼漁業協同組合主催の下に昭和十一年度本會を開催した。出席者は地元組合の外洞爺湖塘路湖、網走湖、厚岸湖、各漁業組合の外關係官廳側、水産會等より四十餘名で盛會を極めた。

本會は本年度を以て解散し明年度よりは北海道鮭鱒保護協會に合併して行はるゝ事に決定した。

○民營孵化事業成績(昭和十年度)

▲鮭 孵化事業成績

孵化場名	親魚捕獲數		使用數		採卵數	孵化數	成 績		分與數	
	♀	♂	♀	♂			♀使用%	♂收容%		孵化%
沙留	281	303	244	231	55,000	45,200	86.8	53.5	90.4	2,253
長流	244	331	243	255	56,500	53,550	99.5	56.9	99.9	2,384
知内	254	264	218	269	201,700	199,355	76.3	100.5	98.8	2,733
厚澤	367	391	346	388	67,500	76,200	94.0	96.7	96.9	2,860
上ノ國	463	553	356	366	110,000	104,400	77.0	74.0	95.0	3,217
尾幌	1,536	1,081	1,300	1,568	295,000	187,500	83.5	146.3	95.4	2,319
吉嘉	901	1,531	855	568	207,500	170,675	90.0	100.1	85.0	2,494
堀株	90	3	10	1	—	—	—	—	—	—
計	4,766	4,877	3,961	2,393	6,730,157	4,419,485	84.0	89.8	83.7	2,546

▲鯿 孵化事業成績

孵化場名	親魚捕獲數		使用數		採卵數	孵化數	成 績		分與數	
	♀	♂	♀	♂			♀使用%	♂收容%		孵化%
冷葉白	3,091	3,033	2,442	2,311	1,000,000	1,685,000	25.8	85.0	99.2	2,217
堀株	234	45	279	47	256,000	330,600	57.2	33.8	86.3	1,947
沙留	55	31	47	27	60,000	53,300	79.6	60	88.7	1,276
計	3,480	3,479	2,768	2,015	1,316,000	2,068,900	30.6	53.0	96.5	2,048
得茂別	▲紅 鯿		▲紅 鯿							
	3,918	1,868	5,866	3,851	1,366	5,253,353	9,471,190	97.3	25.6	75.8
阿寒湖	▲姫 鯿		▲姫 鯿							
	182	79	200	174	7,500	6,000	66.1	15.9	90.6	456
洞爺湖	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
屈斜路湖	▲鮭		▲鮭							
	59	32	100	84	160,000	140,500	81.3	16.0	33.3	—

○役員會記事

本會役員會は去る六月二十七日札幌市グランドホテルに於て開催左記事項に付協議せり。

(一) 報告事項

- 第一號 役員死亡ニ關スル件
- 第二號 十年度事業報告
- 第三號 十年度收支決算報告

(二) 協議事項

- 第一號 十一年度事業計畫並豫算ノ件
- 第二號 役員補缺選舉ニ關スル件

出席者 (順序不同)

- 顧問 飛嶋貫治
- 同 藤田經信
- 同 新井藤一郎

- 理事長 半田芳男
- 同 井筒字三郎
- 同 大西眞平
- 同 稻垣龍
- 同 高津彌三吉
- 同 高野金作
- 同 村山喜作
- 同 梅谷周造
- 同 榎本仁太郎
- 同 山村三郎
- 同 (代)本田善助
- 同 齋藤兵太郎
- 同 (代)水澤一郎
- 同 齋藤主計
- 同 古畑慶助
- 同 中野豊次郎

○第八回本會總會記事

本會第八回總會は去る六月二十八日北海道水産會樓上に於て開催せり。概況を左に要録す。

一、出席者 (順序不同)

- 飛嶋貫治 倉上政幹
- 藤田經信 半田芳男
- 井筒字三郎 大西眞平
- 高津彌三吉 高野金作
- 村山喜作 梅谷周造
- 榎本仁太郎 齋藤主計
- 中野豊次郎 大江肇
- 古畑慶助 小川助次郎
- 藤原初太郎 土屋仙吉
- 前田豊次郎 田中秀穂
- 小林修平 本田善助
- 稻垣龍 水澤一郎
- 向井勇次郎 吉野武者二

二、經過

一、昭和十年度事業報告

一、會員數 (昭和十一年三月末日現在)

一種會員 八拾名 親魚捕獲受託者 二十六名

二種會員 百拾五名 鮭鱈漁業者 三十九名

計 百九拾五名

備考 本年度中ノ異動ハ死亡三名、入會三十一名ナリ

二、機關誌及其他印刷物ノ刊行  
 鮭鱒彙報第七年第二十七號ヨリ第八年第二十八號迄發行  
 シ會員其他關係方面へ配付セリ

三、會議  
 第七回總會ハ昭和十年七月十八日開催セリ出席者四十二名ナリ  
 役員會ハ開催スル機ナカリキ

四、試驗事項  
 (一) 養鱒試驗  
 北海道鮭鱒孵化場構内廢水面ヲ借用シ鱒稚魚養殖試驗  
 ヲ施行中ナルモ未ダ生産魚ヲ試賣スル程度ニ至ラズ

(二) 親魚利用試驗  
 孵化用親魚竝老魚ヲ入手スルコト能ハザリシ爲唯親魚  
 ノ肝臟利用試驗ヲ施行セリ、即肝臟ヲ低溫乾燥シ之ヲ  
 粉末トシテ養魚餌料トシテ又ハ一般榮養劑トシテノ價  
 値ヲ試驗セルモノニシテ其ノ結果ハ未ダ詳報スルノ機  
 ニ至ラザルモ極メテ有利ナルヲ知リタリ

五、調査事項  
 經費不足ノタメ施行セズ

六、斡旋事項  
 虹鱒種卵拾五萬粒ヲ斡旋セリ

收 入

二、昭和十年度決算報告

科 目	豫 算	決 算	對 比		說 明
			増	減	
一、會 費	一、六〇・〇〇	五五五・〇〇	円	一、二五・〇〇	一種會員 二十八名 五二〇圓
二、事業 收入	一、五〇〇・〇〇	一〇一・〇〇	円	一、三九七・〇〇	二種會員 三十五名 五三〇圓 繪葉書賣拂代 五八圓 種卵斡旋代 四五圓
三、雜 收 入	三〇〇・〇〇	六・〇六	円	二九三・九四	彙報購讀料 二四九〇 利子 三圓一六

支 出

科 目	豫 算	決 算	對 比		說 明
			増	減	
一、給 與	一五〇・〇〇	四八〇・〇〇	円	一〇一・〇〇	事務囑託手當、寄稿謝禮
二、事 務 費	三六〇・〇〇	七四・九六	円	二八五・〇四	
需 要 費	三〇・〇〇	三六・七六	円	六・七六	
通 信 運 搬 費	五〇・〇〇	三六・三三	円	一三・六六	
旅 費	三〇〇・〇〇		円	三〇〇・〇〇	要セザリシニヨル
三、事 業 費	二、七〇・〇〇	三六三・三〇	円	二、三三・三〇	
印 刷 費	五〇〇・〇〇	一八二・二五	円	三一七・七五	
會 議 費	四〇〇・〇〇	二二・二五	円	三八・七五	
養鱒試驗費	三〇〇・〇〇		円	三〇〇・〇〇	
親魚利用試驗費	一〇〇・〇〇		円	一〇〇・〇〇	

鮭鱒調査費	1,000.00			1,000.00	施行セザリシニヨル
障害調査費	150.00			150.00	施行セザリシニヨル
幹旋費	100.00			100.00	不要ナリシニヨル
四、雜費	100.00	1.55		98.45	
五、會長交際費	100.00	204.54	4.54		不足四圓五四錢ハ豫備費ヨリ支出セリ
六、負債償還費	300.00	10.00		290.00	
七、豫備費	110.00	106.65		3.35	
計	3,690.00	979.01		3,010.99	

差引殘金貳百四拾七圓九拾貳錢也  
右滿場一致承認さる。

三、昭和十一年度事業計畫竝收支豫算

事業計畫

- 一、機關誌及其ノ他印刷物ノ刊行
- (一) 鮭鱒彙報ヲ四回以上發行ス
- (二) 其他本會ノ目的ヲ達スルタメ必要ナル圖書ヲ豫算

ノ範圍内ニ於テ隨時刊行ス

二、會議

- 總會 一回開催ノ豫定
- 役員會 一回開催ノ豫定

三、試驗事項

- (一) 養鱒試驗  
前年度ニ繼續施行ス
- (二) 親魚利用試驗  
前年度ニ繼續施行ス
- 四、幹旋事項

- (一) 種卵種苗ノ配給幹旋
- (二) 親魚ノ販賣幹旋
- 五、其他必要事項  
事業振興上必要ト認ムル調査、宣傳ヲ豫算ノ範圍内ニ於テ隨時施行ス

收支豫算

科 目	金 額	摘 要
一、會費	1,070.00	一種會員 受託者 三百名 五七〇〇圓 二種會員 養殖業者 二十名 一〇〇〇圓
二、事業收入	900.00	養鱒賣却代 三萬尾一尾三錢
三、雜收	300.00	利子、設計料、手数料、雜誌及印刷物賣却代
四、前年度繰越	247.92	
五、寄附金	192.08	篤志家寄附



三、新冠川々口左右ニ存置スル鮭定七號九號ノ二階網ノ絶對禁止ニ關スル件

四、鮭定置漁業ニ於ケル(特ニ河ノ南側ニ位置スル個所)夜網ノ絶對禁止取締ニ關スル件

五、一定ノ曳揚場ヲ有セザル地曳網漁業ニ於ケル布袋及網目制限ノ絶對的取締ニ關スル件

六、孵化事業場員ノ優遇並ニ孵化施設ノ完璧ヲ期スルノ件

七、新冠川鮭孵化増殖ノ徹底ヲ計ルト共ニ濫リニ新冠鮭ノ名稱ヲ利用セザル様取締方ニ關スル件

八、北海道漁業取締規則第四十三條ヲ左記河川ニ指定セラレタシ

九、風連湖ニ於ケル鮭鱒特別採捕許可制限ヲ左ノ如ク設置セラレタシ、亥水第一、八五一號ヲ以テ許可指令ヲ受ケタル本件中左記條項ヲ改メラレタシ

(以上根室鮭鱒養殖水産組合提出)

以上協議ノ結果何レモ本會提出議案ヨリ一旦撤回シ北海道鮭鱒孵化場へ意見ヲ具陳善處スルコトニ決定セリ。

望ニ添フ様適當ノ方法ヲ考案スルコトニ決定セリ。

五、役員補缺選舉

協議ノ結果左記七氏詮衡委員トナリ協議ス

大西 眞 平君 (親魚捕獲委託者)

齋藤 主 計君 (同)

齋藤 篤君 (同)

淺野 政 勝君 (民間養殖事業經營者)

梅谷 周 造君 (漁業者)

水澤 一 郎君 (同)

榎本 仁太郎君 (二種會員)

詮衡委員協議ノ結果左記ノ通り決定

會長ノ決定ハ明年度總會迄保留シ其間理事長會長ヲ代行

ス尙本會ノ組織並事業方法改善ニ關シテハ本年十一月中ニ

委員會ヲ開催シ協議スルコトニ決セリ

缺員理事ノ補充トシテ左記三氏ヲ推薦

谷 駒 藏君 (故谷茂平氏相續者)

國後養殖水産組合長

根室鮭鱒養殖水産組合長

一〇、親魚捕獲場河川工事ニ關スル件

親魚捕獲場ニ於ル河川内工事施行ニ當リ出願手續ヲ簡易ナランメ許可ヲ得ラル、様其筋へ請願セラレン事ヲ望ム

一一、監視員證交付ニ關スル件

組合ヨリ密漁監視員ヲ配置スルニ當リ監視員ニ對シ資格證明的監視員章ヲ交付セラレン事ヲ望ム

一二、放流稚魚保護ニ關スル件

稚魚放流ニ際シテハ徹底的ニ保護スル方法ヲ講ゼラレン事ヲ望ム

一三、定置漁業權沖出延長ニ關スル件

保護河川附近ニ於ケル各種定置漁業權沖出延長ニ對シテハ現在以上ニ沖出延長ノ許可ヲ與ヘザル様請願セラレン事ヲ望ム

(以上紋別鮭鱒養殖水産組合、網走鮭鱒養殖水産組合提出)

協議ノ結果一〇、一三、ハ本會ヨリ其ノ筋へ陳請スルコトニ決セリ。一一、ハ北海道鮭鱒孵化場ヨリ組合ニ於テ雇傭ノ者デアルト云フ證明書ヲ交付スル事ニ決ス。一二、ハ希

理事三名増員トシテ左記三氏推薦

吉野 武者二君 (養鱒業)

小川 助次郎君 (遊樂部鮭蕃殖組合長)

齋藤 篤君 (三石漁業組合長)

滿場一致可決ス。

六、講演

「魚と人間」 北海道帝國大學醫學部講師

醫學士 野田 信 茂氏

七、視察

閉會役直に此の機會を利用し吉野養鱒場を、翌二十九日

は支笏湖及北海道鮭鱒孵化場等を見學せり。

○會員消息

板倉千松氏

國後養殖水産組合長にして本會理事なる同氏は豫て病氣の處四月二十三日遂に逝去せらる。本會は謹んで哀悼の意を表す。

△新入會員

小林 久雄 京都市 京都帝國大學理學部動物學教  
室

下山 卯之松 樺根郡留別村字年萌北海道鱒鱒孵化場  
年萌事業場員

山屋 直次 北見國紋別郡上湧別村字開盛北海道鱒  
鱒孵化場北見支場員

高橋 榮 國後郡泊村大字東沸  
新谷 英太郎 網走郡網走町

並木 延郎 北海道鱒鱒孵化場虹別支場釧路事業場

土屋 仙吉 靜内郡靜内町

△脱退會員

石井昌衛、土屋誠平、村井義雄、石田竹彦

△道會議員當選

本會役員齋藤主計(擔振水產會長) 太田半三郎(遊樂部鮭  
蕃殖組合理事) 兩氏は去る八月十日の北海道々會議員選舉  
に於て首尾よく當選せらる。

會 告

○會費領收報告(二種會員八月一日迄)

△十一年度分

村上孝一、森五一、押味幸一、大久保司、明石幸輔、  
小林久雄、水戸部勝次、三宅川淺太郎、石川博、吉田武  
一、小野政秋、高橋恒藏、武田尙秀、齋藤憲彰、新谷英

太郎、宮崎朔男、竹林龜太郎、内海登、可香谷政夫、升  
田清、

△十年度分

新妻六郎、野口良雄、森五一、押味幸一、吉田武一、白  
井義雄、大久保司、明石幸輔、秋葉万次郎、吉野知道、  
佐藤三太郎、水戸部勝次、石川博、郡山茂利雄、小野政

秋、高橋恒藏、齋藤憲彰、内海登、可香谷政夫

△九年度分

八木澤喜家、野口良雄、阿部莊吉、石川博、郡山茂利雄  
竹林龜太郎、可香谷政夫

△八年度分

八木澤喜家、野口良雄、阿部莊吉、石川博、郡山茂利雄  
竹林龜太郎

△七年度分

八木澤喜家、野口良雄、阿部莊吉、石川博

△六年度分

野口良雄、石川博

○寄贈圖書

日本水政新聞、水産新報、東京水産新聞、釣人、  
水産公論

◇會費未納の方は至急納入を乞ふ。

◇本會に入會若くは脱會の希望あらば速に其の旨御回報を乞ふ。

## 寄稿 歡迎

一、鮭鱒、淡水々族、淡水養殖、湖沼等に關する論說資料、趣味、地方狀況通信及び寫眞、圖表等の寄稿を歡迎す。

一、本誌に掲載せるものには薄謝を呈す。

一、希望別刷數は原稿に明記され度し。論說資料の各欄に掲載せるものに限り三〇部まで無代進呈す。

一、原稿用紙は申越し次第郵送す。

一、次號原稿は十月二十日までに鮭鱒彙報編輯事務委員（北海道鮭鱒孵化場内）宛御送附あり度し。



北海道鮭鱒孵化場記念スタンプ

昭和十一年九月二十五日印刷  
昭和十一年九月三十日發行

札幌市北二條西七丁目一番地

編輯兼 中 田 芳 男  
發行人

札幌市外苗穂五十番地

印刷人 田 中 幸 司

膽振國千歳村北海道鮭鱒孵化場内

發行所 北海道鮭鱒保護協會

弊所特製『漆塗孵化盆』 其他孵化盆  
 孵化槽、孵化枠、受卵器、各種染料  
 漆、アスファルト(流動)、テレピン油、塗料類  
 亀甲紗(卵掬用)、採卵海綿、標本瓶  
 卵子消毒薬各種、化学薬品、醫療薬品  
 孵化場用印刷物一切、父子堂製劑  
 虹鱒、公魚、鮎、鰻等ノ孵化用器具一式

諸官廳御用達

鮭鱒孵化器製造元  
 山本勝見工作所

塗料部  
 藥品部

札幌市北三條東六丁目電停前  
 電話 二五二七番  
 振替小樽 三九七八番